

東南アジア史学会会報 №8

昭和43年9月30日

委員会報告

本年度第4回委員会を6月29日に東京外国语大学で開いた。山本会長他全委員および地区委員が出席し次回大会の打合せ、来夏の大会を地方で開催する可能性および機関誌発行計画に関する協議をおこなった。

第5回委員会を9月2日に学士会館(本郷)で開いた。山本会長ほか全委員が出席し下半期の月例研究会計画、秋の研究大会の準備、および機関誌発行計画の進展状況の説明があり月例研究会と総会の予定を下記のように決定した。

研究会予定(会場は14頁を参照)

10月18日(金) 内田晶子氏 「フィリピン国立図書館の蔵書について」

(書評) 和田久徳氏

12月 6日(金) 岸幸一氏 「インドネシアの土地改革について」

総会

11月 8日(金) 学士会館分館(本郷)において行う予定

東南アジア史学会第4回研究大会

本年度夏の大会を6月29(土)、30(日)の両日東京外国语大学アジア・アフリカ言語文化研究所で開催した。第1日には60余名の参加者があり河部利夫氏の開会の辞、岡正雄AA研究所長の挨拶の後、統一テーマ「19世紀・20世紀の東南アジアにおける社会変革」の研究発表に入った。田中則雄氏を座長とする午前の部ではAA研の間苧谷栄氏の「ハジ・アグス・サリームの生涯と思想:(イスラム)宗教思想と政治思想の接点」について森、市川、野田の三氏の質疑、続いて東大東洋文化研の高橋彰氏の「フィリピン農村の変容過程に関する若干の問題」について池端氏の質問があった。市川健二郎氏を座長とする午後の部では東大大学院の桜井由躬雄氏の「19世紀ベトナムの紳豪について」を巡り山本、辛島、森の三氏の質問、続いて広島大の矢野暢氏の「タイ政治近代化の過程にみる政治的紛争の諸類型」について森、河部、市川の三氏の質問があった。以上の諸発表を総合した全体討論を河部利夫氏が司会し各発表者と田中、野田、友

杉、田中、竹田、長井、西村、白鳥、浅井、仲田の各氏との間に質疑応答があった。このシンポジウムでは歴史学者だけでなく政治学、経済学、人文地理学、民族学、言語学の各専攻分野の諸学者が発言し、東南アジア近代社会の変革について各専門分野を越えた考え方が示された。

シンポジウム終了後 AA研5階に展示された東京外国语大学およびAA研所蔵の代表的な東南アジア関係書を見学した。引続いて同所で開催した懇親会では桑田六郎氏の音頭による乾盃、松本信広氏他諸氏のテーブル・スピーチがあり盛会裡に第一日を終った。

第2日の午前には和田久徳氏を座長とする自由課題の研究発表があり、市川健二郎氏の「祖国への華僑の政治寄金：陳嘉庚の伝記を中心として」について河部、中村孝志、藤沢、白鳥の4氏のコメントあるいは質問があり、中島慎二郎氏の「マラッカ王国の王統について：パラメスワラとシェリパラメスワラデワサ」に対し生田、山本、仲田その他諸氏の質疑があった。

午後の部では白鳥芳郎氏を座長とする会員協議会で全国各地における東南アジア研究の活動報告をおこない藤原利一郎氏が京大・東南アジアセンターの業績と研究計画の概要について、中村孝志氏が天理大、大阪外語大の研究現状について、藤沢義美氏が東北・北海道地区とくて岩手大学の雲南地域研究書の購入状況について報告した。また河部利夫氏からAA研の夏季語学コース（ベンガル語、カンボジア語）の計画についての説明があった。続いて一般討議に入り次期総会を本年11月8日又は11日のいずれかの一日に行うこととしその最終決定は会場予約と関連し委員会に一任することとなった。また来夏の大会を地方で開催するという提案も異議なく承認し委員会でその事務を進めることとなった。今秋に予定される大会の内容について池端氏よりシンポジウムを開催し「華僑」または「ベトナム」などの統一テーマを扱つたらどうかという意見、山本氏より今夏開催を予定されるふたつの国際会議の報告を加えたいとの意見、市川氏より秋の大会のシンポジウム開催は時間の配分から考えて無理であろうという意見が出た。その結果委員会が上記の意見を尊重し計画することとなった。機関誌発行については仲田、池端、和田、河部、板垣の5氏の意見が出た結果、白鳥座長より機関誌を持つことに異議はない認め、その年報発行のための資金面で委員会が具体化に努力する旨の発言があった。学会会報の内容充実については和田氏より全国地区委員の報告、全国大学講義題名、研究課題、卒業論文等の目録を掲載するための分担執筆者を依頼する案が出た。

午後の後半部では生田滋氏の「ユネスコ東アジア文化研究センターおよび東洋文庫の研究事情」内田晶子氏の「歴代宝案研究グループの研究現情」、辛島昇氏の「国際タミール学会議における東南アジア研究」の3報告があった。第2回最後の閉会の辞の中で山本達郎会長は「社会的空間」

の考え方を述べ日常生活活動の単位が拡大すると共に思考範囲の単位が拡大するという概念を説明し、史実の究明と比較概念の展開との併存関係を説いた。

夏季研究大会発表要旨

ハジ・アグス・サリームの生涯と思想

——(イスラム)宗教思想と政治思想の接点——

間谷 栄

はじめに

低開発地域の政治的・経済的・文化的近代化に関する研究動向の一つに社会変動論的アプローチがあるが、この観点から C. GEERTZ のインドネシア研究を考えてみたい。

I C. GEERTZ のインドネシア研究 —— GEERTZ 理論の全体系的考察とその批判的展開 —— 彼の関心は経済発展を社会・政治・文化的変動を含む広汎な変動過程の中において検討して全体の法則性を把むことにより、そのため経済発展を四つの異なるパターンの変動過程から眺めて「変動」のメカニズムを理論的に考察し、経済的近代化と結びつく社会・文化的変動の法則性を追求する。

GEERTZ の理論には克服すべき問題点は残されるが、これを批判的に踏まえながらインドネシア社会変動の理論の構築を図りたい。

GEERTZ は「世界観」を基準にして「文化の類型」を三つに区分して考える。即ちサントリ (santri), プリヤイ (priyaji), アバンガン (abangan) の三タイプである。また GEERTZ はことにサントリについて「近代派 — 保守派」の区分を重視する。この GEERTZ の見方を拡充して、以上の三類型・二区分のそれぞれの代表的人物または集団を選んで、民族主義運動の展開の中で政治思想と「宗教」思想を検討したい。そこでいまサントリ近代派の代表としてバジ・アグス・サリームを挙げる。

II バジ・アグス・サリームの生涯

III ハジ・アグス・サリームの思想 イスラム思想と政治思想の接点

サリームの思想の原点は、他民族の進歩からとり残されている、他人の意のままになつてゐる民族の「進歩」と「独立」を如何に獲得するか、である。

彼のいう「進歩」とは「西洋式教育からその利点を摂取しながら、われわれの民族の過去からの伝統を改善し完成して達成しうる」ものであり、ダイナミックな運動としてのイスラム改革主義とイスラムに基づく民族・大衆運動が必要とされる。

この「進歩」は「努力」によって獲得しうるものであり、受動的忍従的でなく能動的積極的態度によって運命論・予定論を越えていくべきであるとする。

彼は終始貧困から解放され、真の民族的結束をつくり上げるためにイスラムに依拠していく点からの民族・大衆運動を説いた。この一貫性が他方強力な民族指導者の地位を彼に与えなかつた。

以上の報告に関して、森弘之、市川健二郎、野田彦四郎各氏から、①サリームをサントリ近代派の代表として選んだが他の派の代表としてどう考えるか。②宗教思想と政治思想の関係を問題にすることは民族主義運動史の中でどのような有効性をもつと考えられるか。③チョクロアミノトとの比較で、貧者の救済を目指すチョクロに比べて劣るのではないか、そして両者をカリスマと合理主義との対立とみるのはやや図式的ではないのか。④文化的近代化とは何を指すか。⑤西洋式教育を受けたものがサリームのような行動をどうしてとるのか。⑥サリームが西洋式教育を受けながらそこから脱皮していったのは何故か。などの質疑があつて、報告者が見解を示した。

フィリピン農村の変容過程に関する若干の問題

高 橋 彰

1. まえおき

人文地理の立場から、フィリピン農村を歴史学との接点で分析。

2. フィリピンの農村社会 —— その一般的理解

アメリカの社会学や人類学の業績が多くある。social-class の分析から貸付制や分益小作制を基にする cacique 制を、social structure の分析からは two-class structure をみた。例えば F. LYNCH は big people と little people の二つの social class をみて上対下の対立を考える。

従来からの通説ではフィリピン社会ではカトリック的要素が強いということになっていたが、最近ではカトリック化以前の社会の基層文化の要素が大切ということになってきた。

3. 農村社会変容の条件と階級構造の分析視角

フィリピンの土地制度、社会機構での 19C の変革の時期をどう評価するか。歴史学者 E. WICKBERG は、19C に地主層に大きな変異があつたと指摘している。即ち 18C 末から

この「進歩」は「努力」によって獲得しうるものであり、受動的忍従的でなく能動的積極的態度によって運命論・予定論を越えていくべきであるとする。

彼は終始貧困から解放され、真の民族的結束をつくり上げるためにイスラムに依拠していく点からの民族・大衆運動を説いた。この一貫性が他方強力な民族指導者の地位を彼に与えなかつた。

以上の報告に関して、森弘之、市川健二郎、野田彦四郎各氏から、①サリームをサントリ近代派の代表として選んだが他の派の代表としてどう考えるか。②宗教思想と政治思想の関係を問題にすることは民族主義運動史の中でどのような有効性をもつと考えられるか。③チョクロアミノトとの比較で、貧者の救済を目指すチョクロに比べて劣るのではないか、そして両者をカリスマと合理主義との対立とみるのはやや図式的ではないのか。④文化的近代化とは何を指すか。⑤西洋式教育を受けたものがサリームのような行動をどうしてとるのか。⑥サリームが西洋式教育を受けながらそこから脱皮していったのは何故か。などの質疑があつて、報告者が見解を示した。

フィリピン農村の変容過程に関する若干の問題

高 橋 彰

1. まえおき

人文地理の立場から、フィリピン農村を歴史学との接点で分析。

2. フィリピンの農村社会 —— その一般的理解

アメリカの社会学や人類学の業績が多くある。social-class の分析から貸付制や分益小作制を基にする cacique 制を、social structure の分析からは two-class structure をみた。例えば F. LYNCH は big people と little people の二つの social class をみて上対下の対立を考える。

従来からの通説ではフィリピン社会ではカトリック的要素が強いということになっていたが、最近ではカトリック化以前の社会の基層文化の要素が大切ということになってきた。

3. 農村社会変容の条件と階級構造の分析視角

フィリピンの土地制度、社会機構での 19C の変革の時期をどう評価するか。歴史学者 E. WICKBERG は、19C に地主層に大きな変異があつたと指摘している。即ち 18C 末から

19 C 始めに Chinese Mestizo にて土地が集中し、19 C 中頃には教団に次ぐ勢力になったという。フィリピン農民層の中でも賃労働者が半分近くも占めるのは注目すべきで農業生産の停滞性が示されよう。

4. 中部ルソン平原の米作農村

1958 - 60 年と 1963 年に、典型的な米作地帯の中部ルソンで調査を行なった。この地域は農民騒擾の集中的地域でもある。一般に大土地所有は分解の傾向にあるが、階層的な差に注目すべきである。雇傭労働が主たる役割を果し、家族労働は二義的となる。

5. フィリピン農村社会の特質と展開の方向

地主制の展開がみられるのだが、その大土地所有の成立については充分明らかでない。ただスペイン治下の特權的歴史的土地所有や兼併などの要因を考えられよう。

6. フィリピン農村研究の課題と歴史学への期待

フィリピン一般は一応なされてきたが、地方史の積み上げはどうか。ことにイスラムの問題についてはフィリピン全体としても未だ不充分であろう。またフィリピン経済史の中での 1920 年代のもつ意味 — ことに産業資本の展開という点で — を明らかにしてほしい。

以上の報告について池端雪浦氏から、① フィリピン農村の停滞性の指摘には、戦前の歴史研究が顧みられていないなどの学説史的偏りがあるのではないか。② スペインの植民地であったことを意識しすぎた結果、経済史的にはイギリス支配下にあったことを見逃してはならない。③ WICKBERG のところで、19 C に確立するというより、19 C 後半に確立したとする方が適切ではないか。④ 地方史を積み上げるという方法論に関して、それぞれの生産物を中心に地域を分けていったらどうか。そうすれば農村調査と深く関わりあうと思う。などの問題点が指摘された。

タイ国政治近代化の過程にみる政治的紛争の諸類型

矢野暢

変革には上からのリーダーシップによるものと、下からのものとがあるが、上からのものをみなければならぬというのが基本的姿勢である。

要研究の問題として二つ挙げる。① 従来 ラーマ 3 世までとラーマ 4 世からの政治を分けていたが、むしろラーマ 4 世までとラーマ 5 世からの間に線を劃すべきではないか。② 従来不充分

19 C 始めに Chinese Mestizo にて土地が集中し、19 C 中頃には教団に次ぐ勢力になったという。フィリピン農民層の中でも賃労働者が半分近くも占めるのは注目すべきで農業生産の停滞性が示されよう。

4. 中部ルソン平原の米作農村

1958 - 60 年と 1963 年に、典型的な米作地帯の中部ルソンで調査を行なった。この地域は農民騒擾の集中的地域でもある。一般に大土地所有は分解の傾向にあるが、階層的な差に注目すべきである。雇傭労働が主たる役割を果し、家族労働は二義的となる。

5. フィリピン農村社会の特質と展開の方向

地主制の展開がみられるのだが、その大土地所有の成立については充分明らかでない。ただスペイン治下の特權的歴史的土地所有や兼併などの要因を考えられよう。

6. フィリピン農村研究の課題と歴史学への期待

フィリピン一般は一応なされてきたが、地方史の積み上げはどうか。ことにイスラムの問題についてはフィリピン全体としても未だ不充分であろう。またフィリピン経済史の中での 1920 年代のもつ意味 — ことに産業資本の展開という点で — を明らかにしてほしい。

以上の報告について池端雪浦氏から、① フィリピン農村の停滞性の指摘には、戦前の歴史研究が顧みられていないなどの学説史的偏りがあるのではないか。② スペインの植民地であったことを意識しすぎた結果、経済史的にはイギリス支配下にあったことを見逃してはならない。③ WICKBERG のところで、19 C に確立するというより、19 C 後半に確立したとする方が適切ではないか。④ 地方史を積み上げるという方法論に関して、それぞれの生産物を中心に地域を分けていったらどうか。そうすれば農村調査と深く関わりあうと思う。などの問題点が指摘された。

タイ国政治近代化の過程にみる政治的紛争の諸類型

矢野暢

変革には上からのリーダーシップによるものと、下からのものとがあるが、上からのものをみなければならぬというのが基本的姿勢である。

要研究の問題として二つ挙げる。① 従来 ラーマ 3 世までとラーマ 4 世からの政治を分けていたが、むしろラーマ 4 世までとラーマ 5 世からの間に線を劃すべきではないか。② 従来不充分

であったラーマ6世の研究が必要と思われる。

支配者層は国王、王族、クンナーン官僚の三者より成るが、ラーマ2世時代から上級官僚のブンナークー族が抬頭してきて王族にとってかわる。ラーマ3世および4世の即位にはこの一族が一枚かんだらしい。ラーマ4世は絶対君主といわれているが、ブンナークー族がそれらしくみせていたといえる。ラーマ5世になって始めて国王としての主体性をもつに至り、クンナーン官僚は王族の下にあるべきとする。このラーマ5世の配慮が近代化の要素となつた。彼は優秀な王族をドンドン登用して国内行政機構を改革していく。「チャクリ改革」と簡単に考えて済ませてしまうのではなく、裏にある「複雑な権力争いの側面」を見るべきである。

ラーマ5世が唯一の絶対君主というふさわしかったのに比して、ラーマ6世は統治能力に欠けていて種々の紛争を起した。ことに1909年進歩的な近代化推進の人々を怒らてしまい、憤慨した軍人グループが「ラタナコーシン歴130年クーデタ計画」を図り、ラーマ6世打倒運動は拡った。この計画は裏切りから失敗して歴史から完全に抹消されたが、革命として近代的であり精神向上を目指した点を重要視すべきである。そしてこのラーマ6世の時代1922年にパリで「人民党」の準備が始まり、1932年革命となつた。

以上の報告について、森弘之、河部利夫、市川健二郎の各氏から、①1932年革命を革命とされるならその主体はどのように考えられるのか。②「近代化」に関して、国王の権力に関わることのみを「近代化」とするのか、とすればその「近代」とはどう考えたらよいのか。③1932年革命はむしろファッショ的クーデタとみたらという見解についてはどうか。④1892年の変革はイギリスの影響によるものか、またはタイ社会の変化によるのか、などの質疑が出され報告者もこれに見解を述べた。また仲田浩三氏からは、用いられた史料の性質について質問がなされた。

19世紀ベトナムの紳豪について

桜井由躬雄

1885年の反仏闘争は中農を中心とする村落単位の人民蜂起であると考えるが、この運動の理念、契機は勤皇運動または単純な民族運動に還元しうるものであろうか。反軍側の史料の欠乏からこれを人民内部、前近代社会においてはその表現たる村落の有する反権力的エネルギーの伝統がより新らたなより強大な仏軍侵略という外的権力のインパクトに抗して、従来の権力であった

であったラーマ6世の研究が必要と思われる。

支配者層は国王、王族、クンナーン官僚の三者より成るが、ラーマ2世時代から上級官僚のブンナークー族が抬頭してきて王族にとってかわる。ラーマ3世および4世の即位にはこの一族が一枚かんだらしい。ラーマ4世は絶対君主といわれているが、ブンナークー族がそれらしくみせていたといえる。ラーマ5世になって始めて国王としての主体性をもつに至り、クンナーン官僚は王族の下にあるべきとする。このラーマ5世の配慮が近代化の要素となつた。彼は優秀な王族をドンドン登用して国内行政機構を改革していく。「チャクリ改革」と簡単に考えて済ませてしまうのではなく、裏にある「複雑な権力争いの側面」を見るべきである。

ラーマ5世が唯一の絶対君主というふさわしかったのに比して、ラーマ6世は統治能力に欠けていて種々の紛争を起した。ことに1909年進歩的な近代化推進の人々を怒らしてしまい、憤慨した軍人グループが「ラタナコーシン歴130年クーデタ計画」を図り、ラーマ6世打倒運動は拡った。この計画は裏切りから失敗して歴史から完全に抹消されたが、革命として近代的であり精神向上を目指した点を重要視すべきである。そしてこのラーマ6世の時代1922年にパリで「人民党」の準備が始まり、1932年革命となつた。

以上の報告について、森弘之、河部利夫、市川健二郎の各氏から、①1932年革命を革命とされるならその主体はどのように考えられるのか。②「近代化」に関して、国王の権力に関わることのみを「近代化」とするのか、とすればその「近代」とはどう考えたらよいのか。③1932年革命はむしろファッショ的クーデタとみたらという見解についてはどうか。④1892年の変革はイギリスの影響によるものか、またはタイ社会の変化によるのか、などの質疑が出され報告者もこれに見解を述べた。また仲田浩三氏からは、用いられた史料の性質について質問がなされた。

19世紀ベトナムの紳豪について

桜井由躬雄

1885年の反仏闘争は中農を中心とする村落単位の人民蜂起であると考えるが、この運動の理念、契機は勤皇運動または単純な民族運動に還元しうるものであろうか。反軍側の史料の欠乏からこれを人民内部、前近代社会においてはその表現たる村落の有する反権力的エネルギーの伝統がより新らたなより強大な仏軍侵略という外的権力のインパクトに抗して、従来の権力であった

官人層，封建勢力との結合によって新らしい表現をなしたものと考える。

たとえばエエがその領土権を放棄したコーチシナ三省において長期にわたって抗戦した張定，
張の事例の研究がそのエネルギーの本質を明らかにするであろうし，また農文雲，黎文魁，黎
文品等々の研究によつては19世紀にわたつて展開される農民反乱と同一直線上に1885年を位
置づけることを可能にするであろう。いずれも今後の課題である。

山本氏他より，①公田と私田の比はどの位か，②紳豪等の指導する反乱はフランスの与え
た新たなインパクトに対して盛り上つたものか，それとも以前からあつたか，③豪紳のプレス
ティジの実際は何か，等の質問があり，報告者は各自に見解を述べた。

祖国への華僑の政治寄金

——陳嘉庚の伝記を中心として——

市川 健二郎

変貌する中国と日本とに対し華僑はどのように反応するかという問題を歴史の流れによって眺め，彼等の行動の動機を伝記を通じて把えるに当つて，その教育程度，関心を持つ問題のスケール，新旧価値観の併存に対する考え方，経済変化に伴う新職域への順応性，社会の要求する役割りに対する才能の発揮等の分析要因が考えられる。

シンガポール準2世華僑陳嘉庚（1874—1960年）の行動を4期に区分して分析すると，
1. 孫文の1911年革命募金運動に対し革命成功直後から献金し愛国者と称した。 2. 日華事変当
時の抗日戦費募金運動に対し南僑総会主席として国共双方へ不偏不党の立場で献金した。 3. 太
平洋戦争中はインドネシアに潜伏し戦後の再起に備えた。 4. 新中國の建設に当り北京の政府委
員として帰国華僑の企業投資を促進し，外貨送金を奨励し新中国の国際収支改善に努め，また郷
土開発に努めた，の4つの型に区分できる。

陳は戦時中の愛国献金者として新中国政府部内で特別に扱われた。また新中国は建設当初の外
貨獲得の必要上から華僑資本家と手を結ぶ必要があった。このような樹立当初の中国で陳は愛郷
心と愛国心とが混在した華僑政策を実行し1960年北京で没した。彼の生涯に比べると現在の世
代の華僑は異った社会環境のもとで生活している。送金外貨事情も異なるし東南アジアの企業への
投資，現地国籍の問題等世代の交替に伴う一般状勢が変ってきた。けれども陳の生涯にみられる
4つの反応の型と類似する行動様式が国外，国内情勢の変貌に順応しようとする時に再び現われ

官人層，封建勢力との結合によって新らしい表現をなしたものと考える。

たとえばフエがその領土権を放棄したコーチシナ三省において長期にわたって抗戦した張定，
張権の事例の研究がそのエネルギーの本質を明らかにするであろうし，また農文雲，黎文魁，黎
文品等々の研究によつては19世紀にわたつて展開される農民反乱と同一直線上に1885年を位
置づけることを可能にするであろう。いずれも今後の課題である。

山本氏他より，①公田と私田の比はどの位か，②紳豪等の指導する反乱はフランスの与え
た新たなインパクトに対して盛り上つたものか，それとも以前からあつたか，③豪紳のプレス
ティジの実際は何か，等の質問があり，報告者は各自に見解を述べた。

祖国への華僑の政治寄金

——陳嘉庚の伝記を中心として——

市川 健二郎

変貌する中国と日本とに対し華僑はどのように反応するかという問題を歴史の流れによって眺め，彼等の行動の動機を伝記を通じて把えるに当つて，その教育程度，関心を持つ問題のスケール，新旧価値観の併存に対する考え方，経済変化に伴う新職域への順応性，社会の要求する役割りに対する才能の発揮等の分析要因が考えられる。

シンガポール準2世華僑陳嘉庚（1874—1960年）の行動を4期に区分して分析すると，
1. 孫文の1911年革命募金運動に対し革命成功直後から献金し愛国者と称した。 2. 日華事変当
時の抗日戦費募金運動に対し南僑総会主席として国共双方へ不偏不党の立場で献金した。 3. 太
平洋戦争中はインドネシアに潜伏し戦後の再起に備えた。 4. 新中國の建設に当り北京の政府委
員として帰国華僑の企業投資を促進し，外貨送金を奨励し新中国の国際収支改善に努め，また郷
土開発に努めた，の4つの型に区分できる。

陳は戦時中の愛国献金者として新中国政府部内で特別に扱われた。また新中国は建設当初の外
貨獲得の必要上から華僑資本家と手を結ぶ必要があった。このような樹立当初の中国で陳は愛郷
心と愛国心とが混在した華僑政策を実行し1960年北京で没した。彼の生涯に比べると現在の世
代の華僑は異った社会環境のもとで生活している。送金外貨事情も異なるし東南アジアの企業への
投資，現地国籍の問題等世代の交替に伴う一般状勢が変ってきた。けれども陳の生涯にみられる
4つの反応の型と類似する行動様式が国外，国内情勢の変貌に順応しようとする時に再び現われ

る可能性が強い。

以上の報告に対し、河部氏より3世、4世の華僑をどう扱うか、等、「華僑」の範疇について質問があり、また中村氏よりはマレイシア華僑に関してのコメントがあった。このほか、多くの討論があったが、座長より近く華僑に関するシンポジウムを行ってはどうか、との発言があった。

マラッカ王国の王統について（パラメスワラと
シユリパラメスワラデワサ）

中島慎二郎

馬来編年史の史料的価値は低いものと考えられてきたが再検討する必要がある。マラッカの開拓者パラメスワラを拂里迷蘇刺に従来比定しているが、私は Parama Sura (Parameswara) 「大英王」の意味の称号と解し、開祖の子パラメスワラ2世と同3世を拂里迷蘇刺に当てる。生田氏は R. Ibrahim なる人物はその妻及びしうとのイルカン王の名前が全然記されていないことから架空の人物だろうと推測しているが贅意を表しがたい。また息力八密息瓦児丟ハ沙を王女と結婚した身分の低い男性のジャワ系称号と解釈する生田説は疑問である。

半漁半海賊民（セラーテ）はマラッカ王国の一支柱であったと考えられる。殊にマラッカの建設及びマラッカがポルトガル人によって攻略される際には重要な位置を占めていた。王統問題もヒンドゥー勢力と回教勢力の他にセラーテの勢力の側面から考慮されるべきではなかろうか。

報告に対しては生田滋氏より丁寧なコメントがあり、ことに史料の扱い方に関し、例えは S̄ejarah M̄elayu などをどのように解釈すべきかなどについて異論が述べられた。

第4回国際アジア史学者会議

市川健二郎

Fourth International Conference of Historians of Asia は本年8月5-10日クワランプルのマラヤ大学で開催された。116名の研究発表者が20余ヶ国から集まり、地元マライシアとシンガポールを除く多数参加者は米国およびオーストラリアであった。共産諸国からもソビエト3名、チェコスロバキア3名が参加し、北ボルネオ領土問題で現地と対立関係にあった

る可能性が強い。

以上の報告に対し、河部氏より3世、4世の華僑をどう扱うか、等、「華僑」の範疇について質問があり、また中村氏よりはマレイシア華僑に関してのコメントがあった。このほか、多くの討論があったが、座長より近く華僑に関するシンポジウムを行ってはどうか、との発言があった。

マラッカ王国の王統について（パラメスワラと
シユリパラメスワラデワサ）

中島慎二郎

馬来編年史の史料的価値は低いものと考えられてきたが再検討する必要がある。マラッカの開拓者パラメスワラを拂里迷蘇刺に従来比定しているが、私は Parama Sura (Parameswara) 「大英王」の意味の称号と解し、開祖の子パラメスワラ2世と同3世を拂里迷蘇刺に当てる。生田氏は R. Ibrahim なる人物はその妻及びしうとのイルカン王の名前が全然記されていないことから架空の人物だろうと推測しているが贅意を表しがたい。また息力八密息瓦児丟ハ沙を王女と結婚した身分の低い男性のジャワ系称号と解釈する生田説は疑問である。

半漁半海賊民（セラーテ）はマラッカ王国の一支柱であったと考えられる。殊にマラッカの建設及びマラッカがポルトガル人によって攻略される際には重要な位置を占めていた。王統問題もヒンドゥー勢力と回教勢力の他にセラーテの勢力の側面から考慮されるべきではなかろうか。

報告に対しては生田滋氏より丁寧なコメントがあり、ことに史料の扱い方に関し、例えは S̄ejarah M̄elayu などをどのように解釈すべきかなどについて異論が述べられた。

第4回国際アジア史学者会議

市川健二郎

Fourth International Conference of Historians of Asia は本年8月5-10日クワランプルのマラヤ大学で開催された。116名の研究発表者が20余ヶ国から集まり、地元マライシアとシンガポールを除く多数参加者は米国およびオーストラリアであった。共産諸国からもソビエト3名、チェコスロバキア3名が参加し、北ボルネオ領土問題で現地と対立関係にあった

る可能性が強い。

以上の報告に対し、河部氏より3世、4世の華僑をどう扱うか、等、「華僑」の範疇について質問があり、また中村氏よりはマレイシア華僑に関してのコメントがあった。このほか、多くの討論があったが、座長より近く華僑に関するシンポジウムを行ってはどうか、との発言があった。

マラッカ王国の王統について（パラメスワラと
シユリパラメスワラデワサ）

中島慎二郎

馬来編年史の史料的価値は低いものと考えられてきたが再検討する必要がある。マラッカの開拓者パラメスワラを拂里迷蘇刺に従来比定しているが、私は Parama Sura (Parameswara) 「大英王」の意味の称号と解し、開祖の子パラメスワラ2世と同3世を拂里迷蘇刺に当てる。生田氏は R. Ibrahim なる人物はその妻及びしうとのイルカン王の名前が全然記されていないことから架空の人物だろうと推測しているが贅意を表しがたい。また息力八密息瓦児丟ハ沙を王女と結婚した身分の低い男性のジャワ系称号と解釈する生田説は疑問である。

半漁半海賊民（セラーテ）はマラッカ王国の一支柱であったと考えられる。殊にマラッカの建設及びマラッカがポルトガル人によって攻略される際には重要な位置を占めていた。王統問題もヒンドゥー勢力と回教勢力の他にセラーテの勢力の側面から考慮されるべきではなかろうか。

報告に対しては生田滋氏より丁寧なコメントがあり、ことに史料の扱い方に関し、例えは S̄ejarah M̄elayu などをどのように解釈すべきかなどについて異論が述べられた。

第4回国際アジア史学者会議

市川健二郎

Fourth International Conference of Historians of Asia は本年8月5-10日クワランプルのマラヤ大学で開催された。116名の研究発表者が20余ヶ国から集まり、地元マライシアとシンガポールを除く多数参加者は米国およびオーストラリアであった。共産諸国からもソビエト3名、チェコスロバキア3名が参加し、北ボルネオ領土問題で現地と対立関係にあった

フィリピンからも第2日以後3名が参加した。日本からの出席者は市川ひとりで、他にインドネシア大学で講義している永積昭氏が現地参加した。

最終日の総会で新役員の改選（任期1968年9月より1971年8月までの3年間），および会議開催予定地を選んだ。新会長はタイ国のワンワイ・タヤコン殿下，3人の副会長には日本の山本達郎教授（東アジア代表），インドネシアのサルトノ教授（東南アジア代表）およびインドから一名（南アジア代表）が選ばれた。第5回会議は1971年バンコックで、第6回会議は1974年インド又はパキスタンで、第7回会議は1977年東京でそれぞれ会催したいとの希望案が可決された。

なお近現代史関係の研究発表の中に次の論文がある。

Robert van Niel, Analysis of the Imperial Impact in Java during the early cultivation system.

Akira Nagazumi, Development of Western Education in Indonesia during the second half of the 19th century.

Lee Kam Hing, Aceh at the turn of the 19th century.

Neon Snidvongs & Kasem Sirisumbundh, political Idea of King Chulalongkorn.

Kenjiro Ichikawa, Materials on 19th century Thailand at the Toyo Bunko, Tokyo.

John A. Larkin, Land Policy in the Philippines

Edgar Wickberg, Japanese Land Policies in Taiwan, 1895-1945.

Lim Teck Ghee, The Origins of a Colonial Land Policy.

J. H. Drabble, Investment in the Plantation Rubber Industry in Malaya, circa 1900-22.

Saw Swee Hock & Pearl Chu, The Population of 19th century Penang.

Cheng Siok Hwa, Rice Imports into Malaya: A Brief Historical Survey.

K. G. Tregonning, Ocean Trade as a vital factor in the economic and political well being of the states of Southeast Asia,

J. A. C. Makie, Interest groups and Inflation in Indonesia since 1950. Some problems of methodology in history and the social sciences.

Oliver Popenoe, Sources of Entrepreneurship in Southeast Asia.

Frank H. H. King, The Bank of China is Dead.

D.Rothermund, The Indian Currency 1876-93: A Problem in Asian Economic History.

Milton Osborne, Truong Vinh Ky and Phan Thanh Gian: The Problems of a Nationalist Interpretation of 19th Century Vietnamese History.

V.A.Zharov, Towards a scientific division into periods of the modern and contemporary history of Indonesia.

J.M.Pluvier, The Vietnamese war of Independence (1945-54) and the problem of historical objectivity.

Yong Ching Fatt, Patterns & Traditions of loyalty in the Chinese Community of Singapore, 1900-1941.

James B.Crowley, A New Asian Order: Some notes on Prewar Japanese Nationalism.

Grant K.Goodman, Japan's support for anti-communism in the Philippines during the 1930s.

Serafin D.Quaison, Some notes on the Japanese community in Manila 1898-1941.

N.Taling, Chinese traders and entrepot Labuan in the 19th century.

John F.Cady, America's Post-war Role in Southeast Asia.

Usha Mahajani, Laos: A case study in the Cold War Diplomacy of Aid and Intervention.

Ajit S.Rye, A Note on Philippines-India Relations in the Post-Independence Period.

Victor M.Fic, The September 30th Movement in Indonesia: the role of the P.K.I.

Sartono Kartodirdjo, Religious Movements of Java in the 19th and 20th centuries.

H.J.Benda, The Samin Movement

The Siauw Giap, The Samin Movement in Java: Complementary Remarks.

W.F.Wertheim, From aliran to class struggle in the countryside of Java.

e.Vanickova, Indonesian Tradition and the Impact of the West on Modern Indonesian Theatre and Drama

第8回国際人類学民族学会議について

(白鳥芳郎・中塙発夫)

9月3日より10日まで、東京と京都で開かれたこの会議のあらましについては、新聞等により会員諸氏の御承知のとおりである。

会議は東京では Sectional Meeting で個人の研究発表が行われ、人類学部門と民族学部門のそれぞれの中に部会が設けられた。ここでは特に東南アジア地域に関するものに限り触れておく。

東南アジア地域関係では Ethnohistory and Culture history の部会で白鳥芳郎氏の The genealogy of ethnic groups in southern China: historical note が発表され、また

Social and Political Organization の部会でも多数発表された。フィールド・ワークの成果からは KUNSTARDTAR の Socio-cultural Change among upland peoples of Thailand , 村武精一・菊地靖氏の Social structure of the Batangan in Mindoro, Philippines GEDDES の The influence of the agricultural practices of the Miao of Thailand on their migration and settlement patterns , 畠中幸子氏の Struggle for existence among newly contacted people in the highland of New Guinea , FEINGOLD の Networks of identity: ethnic designations and kin groupings among the Akha of northern Thailand , 未成道男氏の Affinal relationships among the Puyuma of Taiwan 等があり、文化変容については Moos の Some special problems of rapid acculturation in East and Southeast Asia , LEBAR の Ritual wealth and culture change in Southeast Asia , REYNOLDS(H.R.) の Cultural adaptability in the kinship system of the Isneg, Apayao, Philippines 等の研究、華僑については市川健二郎氏の The assimilation of Chinese in Thailand , AMYOT の The Chinese and national integration in Southeast Asia , REYNOLDS(H.I.) の A positive approach to the overseas Chinese problem: enlisting the Chinese in nation-building , COHEN の An empirical test of divorce theory 等が面白く聞かれた。

なお、部会に並行して、フィールド・ワークの成果として映画が上映されたが、例えば GEDDES の The Blue Miao of Thailand などはミヤオ族(青苗)の生活の実態を撮った実際にすぐれた記録的な報告であった。

京都では、シンポジウムが行われ、同じく東南アジアに関係するものでは Culture Change

and Psychological Adjustment (No.14)において、ビルマ・タイ・インドネシア・華僑等の研究があり、Megalithic Problems (No.16)で南中国、沖縄、フィリピン等の比較討論が行われていた。

なお、東南アジア関係で付記すべきことは京都でのワーキング・グループ、South-East Asian Studies で、今度の会議に出席した東南アジア研究者の主な人々が殆んど参加した。岩田慶治氏がオルガナイズし、議長を Prof. LEBAR が勤め、トピックには ① Prehistory ② Ethnohistory ③ Religion ④ Social Structure ⑤ Applied Anthropology にしほられた。①は Prof. SOLHEIM が中心となり、②では白鳥芳郎氏が ethnic group の規定を、classification の問題に歴史的背景の重要性を提起して論じ合い、③では岩田慶治氏の提起した宗教の duality に関する問題につき討論され、④では馬淵東一氏の社会人類学的な立場より、REACH の Political system. of highland Burma. などの論文を引合いで出し、その方法論的な問題に言及して歴史的背景ならびにその資料についても考慮する必要があるとの発言もあった。さらに⑤について Prof. TUGBY から東南アジアを研究の対象としている各地の資料や研究状況、機関等について統計的な調査データが示され、種々の情報の交換が行われた。

なお今後ここに集った研究者が、この会議のみでなく、常時相互に研究情報の交換を行うことが希望され、充実感のこもったシンポジウムが閉じられた。

本会議における発表等は明年二月整理編集の上、一冊のプロシーディングスとして刊行されることになっている。

第8回国際人類学民族学会議において発表された 東南アジア関係主要論文一覧

(市川)

von Koenigswald, G.H.Ralph "Java; Prae-Trinil man."

Shiratori, Yoshiro "The genealogy of ethnic groups in southern China: historical note."

Soejono, R.P. "On prehistoric burial methods in Indonesia."

Feingold, David A. "Network of identity: ethnic designation and kin groupings among the Akha of northern Thailand."

Löffler, Lorenz G. "A diachronic view of Burmese kinship terminology."

and Psychological Adjustment (No.14)において、ビルマ・タイ・インドネシア・華僑等の研究があり、Megalithic Problems (No.16)で南中国、沖縄、フィリピン等の比較討論が行われていた。

なお、東南アジア関係で付記すべきことは京都でのワーキング・グループ、South-East Asian Studies で、今度の会議に出席した東南アジア研究者の主な人々が殆んど参加した。岩田慶治氏がオルガナイズし、議長を Prof. LEBAR が勤め、トピックには ① Prehistory ② Ethnohistory ③ Religion ④ Social Structure ⑤ Applied Anthropology にしほられた。①は Prof. SOLHEIM が中心となり、②では白鳥芳郎氏が ethnic group の規定を、classification の問題に歴史的背景の重要性を提起して論じ合い、③では岩田慶治氏の提起した宗教の duality に関する問題につき討論され、④では馬淵東一氏の社会人類学的な立場より、REACH の Political system. of highland Burma. などの論文を引合いで出し、その方法論的な問題に言及して歴史的背景ならびにその資料についても考慮する必要があるとの発言もあった。さらに⑤について Prof. TUGBY から東南アジアを研究の対象としている各地の資料や研究状況、機関等について統計的な調査データが示され、種々の情報の交換が行われた。

なお今後ここに集った研究者が、この会議のみでなく、常時相互に研究情報の交換を行うことが希望され、充実感のこもったシンポジウムが閉じられた。

本会議における発表等は明年二月整理編集の上、一冊のプロシーディングスとして刊行されることになっている。

第8回国際人類学民族学会議において発表された 東南アジア関係主要論文一覧

(市川)

von Koenigswald, G.H.Ralph "Java; Prae-Trinil man."

Shiratori, Yoshiro "The genealogy of ethnic groups in southern China: historical note."

Soejono, R.P. "On prehistoric burial methods in Indonesia."

Feingold, David A. "Network of identity: ethnic designation and kin groupings among the Akha of northern Thailand."

Löffler, Lorenz G. "A diachronic view of Burmese kinship terminology."

- Muratake, Seiichi & Kikuchi, Yasushi "Social structure of the Batangan in Mindoro, Philippines."
- Ichikawa, Kenjiro "The assimilation of Chinese in Thailand."
- Reynolds, Hubert I. "A positive approach to the overseas Chinese problem: enlisting the Chinese in nation-building."
- Amyot, Jacques "The Chinese and national integration in Southeast Asia."
- Moos, Felix "Some special problems of rapid acculturation in East and Southeast Asia."
- Lebar, Frank M. "Ritual wealth and change in Southeast Asia."
- Reynolds, Harriet R. "Cultural adaptability in the kinship system of the Isneg, Apayao, Philippines."
- Stone, Richard L. "Policemen and lagay in Greater Manila: the politics of public property."
- Kunstadter, Peter "Socio-cultural change among upland peoples of Thailand."
- Geddes, William R. "The influence of the agricultural practices of the Miao of Thailand on their migration and settlement patterns."
- Spielman, Hans J. "Religious attitudes and economic activities of the Lahu, Northern Thailand."
- Stratanovich, G.G. "The role of religion in the contemporary life of Southeast Asian people."
- Quisumbing, Lourdes R. "Cebuano child-rearing practices."
- Djokokentjono "Some problems of English language teaching in Indonesia."
- Fox, Robert B. "The paleolithic in the Philippines."
- Madigan, Francis C. "Differential fertility in Cagayan de Oro City, Philippines."
- Postma, Petronella A. "Changing urban family structures and attitudes in Djakarta."
- Leach, E. R. "The concept of sin among the Kachin of north Burma."
- Jain, R.K. "Religion and morality: a preliminary framework for comparison of beliefs and practices among Hindu Tamils of India and Malaysia."

京都大学東南アジア研究センター留学生募集のお知らせ

- 留学地 東南アジア
- 留学期間 約 1 カ年
- 費用 全額支給
- 締切期日 昭和 43 年 11 月 31 日

応募資格その他の詳細については、東南アジア研究センターへお問合せ下さい。

また本会事務局（東京大学南方史研究室気付）でも募集要項、申込用書類をお預りしています。

新研究機関の研究員募集

Institute of Southeast Asian Studies, Singapore (略称 ISEAS) が本年 5 月シンガポール国会により創設された。初代所長 Harry J. Benda. 東南アジアの社会科学と人文科学研究をおこなう世界各国とくに東南アジア諸国の学者は一年間(さらに一年間の延長可能)研究費を得て滞在研究できる。現在研究員募集中。シンガポール大、南洋大と協力するが研究員が講義をし、または履修する義務はない。問合せ先先: Mr. Lim Phai Som, Executive Secretary, Institute of Southeast Asian Studies, Cluny Road, Singapore,

秋季研究会会場(1 頁参照)

10 月 18 日 : お茶の水女子大学史学研究室(地下鉄茗荷谷駅下車徒歩 5 分

または都電 17 番大塚 2 丁目下車)

12 月 6 日 : 学士会館分館(本郷)2 号室

いずれも午後 5 時 - 7 時